



2025年

4月第1・2週の主日礼拝説教要約

・ 4月 6日 マルコ福音書 11 : 1 - 10 .

『 最後の歓待 』

・ 4月 13日 ヨハネ福音書 19 : 1 - 12 .

『 見よ、この人を 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 最後の歓待 》

後世の教会暦の、所謂“棕櫚の主日”の出来事です。イエスと一行（弟子たちと随行ら）が、ガリラヤを出てエリコを經由し、（ベタニアで？）安息日を過ごし、その翌日エルサレムに入城する場面です。

イエスは事前にその手前の村に、二人の弟子を送り出し、ある特定の家の紐で繋がれている子驢馬の確保を命じます。命じられたとおりに、「主（人）がお入り用なのです」と、先方に理由を述べると、殆ど何の抵抗もなく、その家の子驢馬を融通してもらえました。

すると、イエスはこれ（子驢馬）に跨り、一行を引き連れて、エルサレムに入城を果たすと、そこにはエリコと同様に彼らを歓待する多くの人々がいて、今度は各々、自分の衣を進路に広げ、刈り取ってきたばかりの茎草（棕櫚？）を道に敷いて迎え入れ、歓喜の声をあげます。

ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。我らの父ダビデの来たるべき国に、祝福があるように。いと高き所にホサナ。

（ 11 : 9b-10 ）

イエスは神殿の境内に入り、周囲を一瞥し、なぜかそのまま神殿を出て、「夕刻になったので」近隣のべたニアに引き返しました。

マルコ福音書によると、当日のイエスの行動はここまでです。マタイ福音書やルカ福音書とは異なり、この日の“宮清め”の断行の報告はなく、それは翌日の行動として記されています。

いずれにしてもイエスがこの世で人々から“歓待”を受けたのは、この時が最後です。受難（十字架刑）の金曜日まであと五日です。イエスがユダヤの王位に就くことによる世直しに思いを寄せる人々がその時、そこに複数いたことは確かです。もちろん権力者の立場からすると、それはクーデターに他なりません。しかし、アラブ人の血を引くヘロデ王による現状の支配（ローマの傀儡政権）ではない、ダビデの血筋のユダヤ人の王の即位を望む人々が、ナザレのイエスこそ“適任者”であるとの認識を深めていたことは、間違いなさそうです。

《 見よ、この人を 》

神をそしる者はその罪を負わなければならない。主の名をそしる者は必ず死ななければならない……イスラエル人であれ、寄留者であれ、御名をそしる者は死ななければならない。(レビ記24:15b…16)

私たちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです。(ヨハネ福音書19:7b)

ユダヤのこの律法を根拠に、「神の子と自称した」イエスは今、裁かれようとしています。といってもローマ帝国にはそのような法律は存在しません。ローマの皇帝崇拜を強要する時代が来るまでには、まだまだ時間があります。“容疑者”イエスがローマ総督のポンティオ・ピラトの官邸に連行されて来たのは、十字架刑の直前のことでした。準備に準備を重ね、口裏を合わせて、待ちに待ったこの日を迎えたユダヤ人の中の敵対者らは、やっとなことイエスを追い詰めて、公然と裁きにかけるチャンスを得たのです。ところが総督は彼らに対して、

あなたがたが引き取って、自分たちの律法に従って裁くがよい。
(ヨハネ福音書18:31)

見よ、この人を(人だ)……あなたがたが引き取って十字架につけるがよい。私はこの男(イエス)に罪を見出せない。
(同書19:5b…6b)

などと言って、裁判を“拒否”し続けます。ローマ法に抵触しない限り、ローマ総督が人を裁くことなどあり得ないのだと、どうにかして頑迷なユダヤ人たちを諭さなければなりません。けれどもイエスの敵対者らは、一歩も引き下がろうとはしません。

(イエスを)十字架につける、十字架につける。
(ヨハネ福音書19:6)

堂々巡りの“神の子論争”では決着が付かないことを悟った敵対者のユダヤ人たちは、今度は、イエスは自分自身を“王”だと言った皇帝の反逆者なのだと、争点を絞ります。もし、総督がこの“反逆者”の発言にまともに取り合わないのだとすると、総督も、同様の嫌疑をかけられることになるぞ、それでもよいのかと、食い下がります。よく練られた、ユダヤ人の“想定問答”です。神には通用しませんが、人間（総督）には通用しそうです。総督はもう、この議論に時間を割くことを拒否します。所詮、ユダヤ人同士の世界で発生した内紛であり、ローマ人の自分がこの案件に巻き込まれ、深入りすることは禁物である、やけどをしないうちに手を引くにこしたことはないといエスの擁護を断念（放棄？）します。

イエスの十字架刑は、このような空疎な議論と、はなはだ不可解な成り行きで成立します。そこに、空前絶後の神の業が成立することなど、この段階で察知した者は一人もおりませんでした。